Black a wing an apostle ～黒き翼の使徒～

時政

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｂｌａｃｋ　ａ　ｗｉｎｇ　ａｎ　ａｐｏｓｔｌｅ　～黒き翼の使徒～

【Ｎコード】
Ｎ５３４１Ｄ

【作者名】
時政

【あらすじ】
ＫＡＲＡＳＵ特殊傭兵部隊世界の秩序を裏から守る謎多き者達…戦地では決して聞きたくない名だ…法にも政治にも囚われない隠し部隊その中に存続する一人の男レバン＝ウィンド彼の行く末に待つものとは…

シャピトル１：黒き翼の持ち主

身にしみる冷たさを放つ風が吹く季節
どこにでもある見慣れた無人島

この無人島の地下にある政府にも法にもとらわれることの無い特殊傭兵部隊“ＫＡＲＡＳＵ”がある

一般的にこの組織は公開されてはいない

ここには５人の選ばれし者達がいる

それぞれ金によってのみ動く
依頼内容がどんな物であってもだ

この世界は３大陸によって成り立っている

“グラス大陸”

“ガルバート大陸”

“ギミニヤ大陸”

それぞれ住んでいる種族が違うのだグラス大陸
ここは吹雪が吹き荒れる大陸で魔族が住んでおり魔法が発展した大陸だ

カルバート大陸
ここは獣人族が住んでおりジャングルなど野生みあふれる力を放つ

者が住んでいる

ギミニヤ大陸
ここは人が住む大陸で四季がある
物を作る技術の高さが目立つ大陸だ

そしてこの無人島の場所は3大陸に囲まれた形で存在している

“ＫＡＲＡＳＵ”
この名は決して表舞台にでてはいけない
裏の存在なのだ…

〜“ＫＡＲＡＳＵ”組織内部〜

黒いレンガで構成された部屋の中にろうそくの光によって照らし出されて映る黒い鳥の絵が飾り付けられている部屋で話が行われていた

「何です、急に呼び出して？」

綺麗な黄色の髪をし謎の模様をあしらったコートを着た１７０くらいの背丈をした男性が同じく謎の模様をあしらったコートを羽織っている白いロングヘアーをした１８０くらいの背丈をした男に呼ばれていた

この黄色い髪をしたのがレバン＝ウィンド
「お前に依頼が来ている」

「俺にですか？
ソルド隊長」

「あぁ」

レバンは一通の黒い手紙を受け取った

手紙を渡した相手

ソルド（ソルド＝グラン）はＫＡＲＡＳＵの隊長であり組織を立ち上げた張本人だ

「では私は失礼する」

ソルドは部屋を出て行った

レバンはその姿を見送った後黒い手紙の封を開け、中から折り畳まれた紙を取り出して近場にあった木製の椅子に腰をかけた

少し嫌な音がしたものの椅子には以上はない

「ギミニヤ大陸の“ロード国”で犯罪組織の抹殺…」

手紙には日時に詳しい場所が書かれていた

（……依頼金ってこれだけ……？）

一緒に同封されてくる依頼金は１００ｗ（ウイング）（１０００円）

（……これでこの仕事…ふざけんなぁ！！）

「あ、言い忘れたが現場で会うらしいからよろしく」

ソルドはやったりという感じで微笑みつつ扉を開け伝えるとまた出

て行った

（……あの笑顔…絶対何かたくらんでるよ）

レバンはガクーンと肩を落として沈んでいた

（とりあえず用意するか）

レバンは自分の部屋に戻ると剣やらなにやらを用意して移動装置がある場所に来ていた

「隊長準備出来ました」

怪しげなホール状の筒三本の近くでなにやら機械をいじっているソルドに伝えた

「そうか、だったら一番左の筒に入れ」

レバンは一番左の筒に入った

「よし、じゃあ行ってこい」

ソルドは手前にあったレバーを引いた

すると装置が作動しだし、レバンを光が包んだ

ニッコリ

ソルドは大量の金を片手に見送った

（あの金って…まさか……依頼金？

……強欲やろー！！金返しやがれぇ！！）

（ついた……）

街の裏街道のような所に気落ちしつつも降り立った

「おい！！」

「？」

突然声がしたので聞こえて来た方に振り返ると黒いミット帽に黒いサングラスとマスクをした黒コートの男がいた

「そこの怪しい奴どきやがれ！！
後ろの奴に用事があるんだよ！！」

（どっちかって言うとあんたの方が怪しいだろ…）

レバンは黒コートの視線を追い自分の後ろをみるとショートカットで髪は薄い紫、目は緑の学生服姿の女性が震えながら立っていた

（なんか面倒なとこに降りちゃったみたいだな…）

レバンは頭に手を置いてやれやれというかんじだった

ヒソヒソ

「どういう状況か教えてくれないか？」

「え…」

突然話しかけられて困惑していたがゆっくりと状況を話し出した

「なーる程、まっ少し待ってな」
レバンは服の内ポケットから小さな筒を出して
「Ｂｒａｋ　ａ　ｗｉｎｇ　ｋｉｌｌｅｒ（黒い翼の殺し屋）」
「ｏｐｅｎ　ｔｈｅ　Ｃｒｏｗｅ　ｓｗｏｒｄ（開け、カラスの剣）」
筒状の物は光を放ち
黒い羽が舞う中刀身が黒く柄が怪しく光る鉱石で作られた剣になった
「覚悟しろよ…犯罪組織のお一人様」

「？！
な、何のことだか」
「そんなに慌てるなよ。
今回の依頼主の依頼内容に書かれてる組織は滅さなきゃな」
（この人がソルドさんが言ってた“ＫＡＲＡＳＵ”の…）
レバンは剣を相手に向けて
「さ、お嬢さんは少し目をつぶってな」
姿勢を低くして相手の懐に入り腹部を切り裂いた
「ぐっ…このガキがぁ！！」

黒コートの男は懐から小さな拳銃を抜き出して斬り込んで来たレバンに銃口を向けて二発打った

カキンッ

「んなもんきかないよ」レバンは剣を銃口に向けて横一線にして弾をはじいた

「いろんな事聞きたいから命だけはとらない…って普通は言うんだろうが俺にはそんな芸当は出来ない」

レバンは一歩下がり

「消えてもらおうか」

剣を前に翳して左手を上の方に添えた形になった

「行くぜ」

剣は黒い羽を纏い
その剣を下段に構えたまま消えた

「！！
速い！！」

黒コートの男がレバンの存在に気付いた頃には既に懐に入られており
レバンは黒コートの男を切り裂いていた

黒コートの男はその場に倒れると黒い羽となり消え去った
その羽はまるでレバンを飲み込むかのようにレバン自身を取り囲み散らばって言った

［さて、依頼内容を詳しく教えて貰おうか］

剣を元の筒状に戻すとコートの内ポケットに閉まった

［あなたがＫＡＲＡＳＵのレバン……さん？］

「ああ。」

女性は少し考えて

「近くに私の家が在りますそこで…」

「了解」

シャピトル2：剣の名と女性の依頼…

「こ、ここが家？！」

レバンは女性に誘導されながら付いた先は広い庭に豪華な屋敷。
そして、使用人のメイドに執事。
流石にこの広さの家を見た者は驚くのは当たり前だと言える。

「どうぞ…」

「あ、あぁ」

レバンは中に入ってからも物珍しそうに庭や屋敷の中を見回してる。

レバンは窓際に立ち、近場のソファーに腰をかけた女性をみた

［早速だが依頼の詳しい内容、あんたの名前を教えてもらえないだろうか？
ちなみに俺の名前はレバンだ］

レバンは軽く挨拶をした

［私の名前はレイン＝クラウン。
依頼内容は渡した手紙にかいてあるとおりで、標的はギリカス＝ゼバン］

（クラウン……一国の中で有名な技術会社を仕切るメノス＝クラウンの娘と言うわけか…
犯罪組織に狙われるのも仕方ないわけだ。）

［方法は？］

［なんでもかまいません］

（何でもって……一番困るんだよな）

レバンは心の中で大きなため息をはきやる気をなくしてしまった

「なら、かかってきたときに組織ごと滅する……良いか？」

［はい］

やる気は無くしても決してそれを表に出さないのがＫＡＲＡＳＵのメンバーとして、いや、仕事としてだろう

「なら、明日あんたんとこの会社に行かせてもらい現状の把握をしたい」

「はい…でしたら今日は私の部屋で泊まって下さい」

（何故に部屋限定？！）

「部屋なら沢山あるのに何でここ指定なんだ？」

「……一人じゃ寂しいから……」

レインは頬を赤らめてもじもじしていた

（可愛い……
はっ！！仕事仕事）

レバンは不覚にもその姿に心を奪われてしまった

（作戦成功）

レインは密かにレバンをいかに手名付けようか考えていたのだった…
言うまでもないがこの後彼女の隠された性格によってレバンがどん
な目にあったかとてもじゃないが言ええない……

「お嬢様、お食事の用意ができました」

執事らしき人がノックをした後部屋に入って来た

「そう、行くわよレバン」

「は、はい……」

レバンは服がはだけたうえにあちらこちらに鞭の跡や鎖の跡などと
言った物が生々しく付いていた

執事はレバンの耳元で

「あなたもやられたみたいですね…
楽しかったでしょ？」

「いや、全然…」

「至福のひとときですのに…」

執事は首を傾げていた

（この人もいけない方向の人だな…
うぅ…いたい……）

～食堂～

レバンはレインと執事の後に続きかなり長いロイヤルなロングテーブルの席に向かい合わせに腰を下ろした

「ではごゆっくり…」

執事は食事の準備をし終えると入ってきた時の茶色い扉の前に戻って行った

「いただきます」

レバンは目の前にある肉をナイフやフォークを綺麗に使い食事をし終えた

「ナイフやフォークの使い方綺麗ね…
誰に教えてもらったの？」

レインも食事をし終えた
そのあいた皿を執事やコックなどが片付けを始めた

「ん？まあ隊長にだな
なんか色んな事ができないとこの仕事はできんって言われてな」
レバンは腕を組み椅子に深く腰をかけた
「そう…じゃあそろそろ戻りましょうか」
レインは席を立った
「俺は少しやることが…」
「良いから来る！！」
ビシビシとどこから取り出したのか分からないが鞭をしならせてレバンを見下ろした
「わ、わかりました」
大量のいやな汗をかきながら渋々ついて行った
（何かさっきからやな気配を感じるんだが…）
部屋に戻る道にある大きな窓から見える月明かりに照らされた屋敷の一部の屋根を険しい表情で立ち止まって見ていた
「何してるの！！
さっさと行くわよ！！」
「は、はい…」
（…何事もなくこの依頼を終えれたら良いんだが…）

レバンは苦笑いしながらレインに答えたがその後すぐに眉間に皺を寄せた

（考えてることが当たらなきゃ良いんだが…）

～部屋の中～

「いい？メンバーの名前と人数覚えた？」

「ああ、人数は５０人だろ？
大丈夫だ一人で充分倒せるさ」

「そう…なら早速遊びましょうか」

レインは満面の笑みで鞭をしならせている

（え…誰か助けて…）

「いや、明日からきちんとした任務が始まりますし…」

「逃げようとしたって駄目よ…
あなたのやられてる姿結構気に入ったんだから」

レインは満面の笑みで続けた

（へ、へるぷみ～！！）
その日の夜、レインの部屋からは断末魔が聞こえたと言う…

〜翌朝〜

「準備は出来たかしら？」

「待ってくれ相棒の手入れがまだ」

窓から朝の光が射す中レバンは昨日使った剣をソファーの上に座りながら取り出し、日の光に当てながら手入れをし始めた

「綺麗ね…」

レインはレバンの隣に腰を下ろし、朝の光が当たり光沢が虹色に光っている剣を見てそう口に出した

「この剣名は何て言うの？」

視線をレバンに移した

「名か…名は無い…」

レバンは剣を光に翳した

「名がないなんてもったいないわね…
そうだ
クロウアプソーテルってのはどう？」

「クロウアプソーテル…カラスの使徒か…
良いなそうさせてもらおう」

レバンはレインに笑顔でお礼を言った

（な、何よ…この可愛い笑顔は…）

レインは頬を赤らめて目をそらした

「どうした？」

「な、何でもないわよ！！
さっさと行くわよ！！」

レインはその場を足早に出て行った

（訳分からん依頼主だな…）

レバンも跡を追い部屋を出た

シャピトル3：任務スタート！！

「ここが会社ねぇ…　流石にでかいな」

レバンは見上げるようにして目の前の高層ビルを見た

「普通でしょ。」

（いや普通じゃないでしょ…これだから金持ちの…）

「金持ちの何だって？」

「な、何でも御座いませんです！！」

レインは怪しい笑みを浮かべてまたまたどこかから取り出した革の鞭をしならせていた

（な、何で心の中読まれてんだ！？）

レインはため息をはいて

「で、その服装何とかならないの？
目立ってしょうがない」

レバンの来ている黒コートを指差した

「ん？
これ仕事着だし仕方ないでしょ」

レインはしばし顎に手を添えて…

「ちょっと来なさい！！」

レバンはコートの襟を掴まれ引きずられるようにレインにつれてかれた

「すみませんこの子に合う服ください」

レインは服屋に連れてきたのだ

レインの問い掛けに店の店員が出て来て話を付けて服やらアクセサリーやらをレインに見せてた

（今この子って言われたよな…

俺17だぞ…一応年上…か？）

レバンは年を聞くのを忘れていたのにようやく気付いた

「レノン…あんた歳いくつだ？」

レバンはいまだに店員と話してるレノンの元に行き質問をした

「女性に歳聞くなんて失礼ね！！

でもまあ教えといてあげるわ。」

レノンは自分の髪を一撫でして

「17よ。
あなたと同じ歳よ」
それだけ言うとレノンは店員と再び話し出した
（同い年なのに年下扱いされたのか…）
少しショックを受けたレバンであった
数時間後…
店で服やアクセサリーを買ったレノンは早速レバンに無理矢理着させた
「あら、結構似合ってるじゃない」
「そ、そうか？」
少し照れながら試着室から出て来たレバンはベースを黒とした服装にアクセサリーや赤いベルトなどといった現代風にまとめられている
「あまりというかこういうの初めて着るな。」
「まさかいつもあの仕事着…？」
レノンは疑いの目でレバンをジーっと見た
「そうだが？」
レノンはガクッと肩を落としたのに対してレバンはケロッとしている

「……もういいわ、行きましょう」
「??
ああ」
レノンは肩をガクッと落としながら店を後にした
そして何分か後再び大きなビルを見上げるレバンが居た
「こ、ここか…」
「さ、行きましょう」
レバンはレノンの後に続いてビルの中に入っていった
内装は普通の会社と変わらず床には何かのマークかは分からないが記されている
その場を物珍しそうに見ていたレバンを後目にレノンは受付に行き少し話した後レバンを連れて巨大エレベーターに乗り最上階に向かった
チーン
エレベーターは最上階の５０階に付き
目の前の扉が開くと赤をベースに金色で装飾された部屋全体に馬鹿でかい茶色い扉の左側に同じく茶色のディスクが置かれており、そ

のディスク上にパソコンが設置してありそれを操作している秘書らしき人物が目に入ってきた

「ご苦労様ですお嬢様。
後ろの方は…？」

黒スーツに身をまとった女性がディスクから離れてレノンに挨拶をした後、レノンの後ろで腕を組んで部屋を見回しているレバンに視線を向けて聞いた

「ああ、例の人よ」

「そうですか。
会長は奥に…」

秘書らしき女性は一歩横に動き手を扉に向けた

「有り難う。」

レノンはそう言うと扉を開けて中に入って行った

（まだ気配がするな…）

レバンはレノンの後に続き扉の先に進んでいった

扉の先には一カ所だけ窓一面の壁に茶色い高級そうなソファーがガラス張りのテーブルを挟むように２つ

そして巨大なデジタルテレビがあった
そして窓際におかれた豪華なデスクの椅子に座って書類を纏めている白髪でオールバックの茶色いスーツの男性が居た
おそらくレノンの父親だろう

「お父様、連れてまいりました」

レノンの言葉に気づきレバンの方を見た

「君が…初めまして私が今回娘に頼み依頼したメノス＝クラウンだ。」

メノスは立ち上がりレバンの下まで行き手を差しだし握手をした

「ＫＡＲＡＳＵから来たレバン＝ウィンドです。
レノンさんに依頼内容は聞いております。」

レバンは手を離して挨拶をした

「では、私はそこのソファーで待機しますので」

「分かりました…ではお茶でも」

「いえ、結構です」

レバンは断るとソファーに腰をかけた

「何をしてる？」

ソファーに腰を下ろしているレバンの周りをレノンがぐるぐる廻っていた

「別に…良く落ち着いていられるなぁって」

レノンはレバンの隣に腰を下ろした

「怖くないの？
もしかしたら死ぬかもしれないのに」

目を閉じているレバンの顔を覗き込んだ

「怖くはないな。
今までいろんな奴を殺してきた…だから自信がある、負ける気はしないんだ」

レバンはゆっくりと目を開け

「俺が怖いか？」

レバンのその問いかけはその場を凍り付かせた

「……来たか」

その凍った場を打ち消したのはビルの真下から聞こえて来る無数のバイク音だった

「メノスさん、そしてレノン。

あなた達はここにいてください」
レバンはそう言うと来た道を戻っていった
（何も言えなかった…
真剣な顔…鋭くなった目つき…
正直怖い…　）
レノンはただその場に固まりレバンの背中を見送ったのだった

「待たせたな…」
レバンは外に出ると剣を開放していた
「なんだてめぇは！？
ガキは引っ込んでな！！」
いかにも下っ端と思われる男達がバイクにまたがりながら鉄パイプを振り上げレバンに向かって行ったのであった
「相手の力量も知らずにかかってくるとは愚かな奴らだ…
死にさらせゲスが…」
レバンは蝶が羽を羽ばたかせ宙を舞うかのように次々に斬り殺していった…
［っつ…つえぇ…］
残った数人の者達は皆引いていた

無論、斬り殺された者は血の一滴も残らず全て黒い羽根となり消え去っていた

「ギリカス＝ゼバンは誰だ？」

クロウアプソーテルを顔の横の位置まで上げて剣先を敵の集団の方に向けた

「っつ…野郎共かかれ！！」

「！！」

残りの者達が乗っていたバイクや倒されたものが乗っていたバイクが変形し右腕が剣の黒メタルなロボに変形し、残りの者達と共にかかってきた

（あの金髪でがたいの良い奴がギリカスか…）

「待ってなゲスの親玉…直ぐ殺してやる」

レバンはまず人の方を殺しにかかった
右斜めから来る者を左斜め下から右斜め上に切り上げて倒しその反動を生かし体を回転させ背後に迫ってきた者を横一線になぎ払うなどしながら

（アイツはやべぇ…
話が違うじゃねぇか…
このどさくさに紛れて退かせてもらうぜ）

ギリカスはバイクにまたがり、風のように去っていった
「お、おい！！
話が違うじゃねぇか！！」

ギリカスはどこかの古びた廃工場に来ていた
扉を勢い良く開けるとずかずかと歩き、どこかの制服だろうか？
赤黒く煌びやかなコートを羽織り胸元に狼に似た印が施されており、
カーボーイが被るような帽子の黒いバージョンを深く被った男がリ
ボルバー式の拳銃を片手に何かを見ていた

「人聞きが悪い…
ちゃんと教えたじゃないですか、場所を」

その人物は感情と言う物を感じさせない雰囲気を持ったある種の恐
怖を持つ話し方をするのだった

「場所はどおでも良い！！
奴は何者だ！！
バカ見てぇにつえぇじゃねぇか！！
あんたからの情報じゃそんな感じはなかったのによ！！」

ギリカスは怒りを込めて怒鳴った

「…そこまで強いのですか…これは失礼しました。
ではこれをお使いください。」

赤黒いコートの人物は軽く会釈をし、手に持っていた拳銃を渡した

「けっ…仕方ねぇそれでゆる…！？
ガハッ！！」

ギリカスは受け取った瞬間胸を抑えてその場に倒れ込んだ

「シルバーウルフキラー…狼男をゆういつ倒せるもの…銀色の弾を装着し数多の魔物を倒してきた正義の拳銃。貴方のように汚れた者は伝説の獣…狼の力により死に至る…」

黒い帽子を取りギリカスの上に落とし拳銃を拾い上げた
帽子を取り出てきたのはレバンと同じ黄色い髪が腰までの長さがあり、美しい男性の顔が姿を表したのだった

場所は再びビルの前で闘いがまだ繰り広げられていた

「いつの間にか逃げたか…まあいい、また次の機会を待てば」

「ギィー…」

「まずはこいつか…」

黒メタルのロボは右腕の剣をレバンに垂直に振り下ろした

「正直あきた…眠い…」

レバンは欠伸をしながら残りの三体が一斉に剣を振り降ろす中体制を低くし体を弧を描くように回転させ黒メタルのロボを真っ二つに

した

「戻るか」

レバンはその場を去るとロボは黒い羽となり何もなかったかのように普段の賑やかさが戻っていた

「悪い、逃がしちまった」

レバンは頭を掻きながら部屋の中に入って来た

「窓から見てました

まだ機会はあるでしょう、その時はお願いします」

メノスはガラス越しに深々とお辞儀をした

「分かってます。

次はとりにが……げふっ！？」

同じく窓際に立っていたレノンが凄い勢いでレバンに近づき頬を思い切り殴りとばした

レバンは何がおきたか理解できないうちに入って来たばっかの扉をぶち破りエレベーターに一直線に飛びそのエレベーターは一度一階まで行き再び元の階に戻ってきた

「いきなり何するんだ……ですか…」

扉が開くと同時に威勢良く言ったのだが仁王立ちしてどす黒い気を発しているレノンを見てヤバイと言う感覚が出てとっさに敬語にし

たのだった

「いったん閉めまーす」

「閉めない！！」

レノンはスイッチを押し閉められかけた扉をこじ開けた

「あなたは今日から私の側から離れない…いつ何時も。良いですね！？」

顔をぐっと近寄せて引きつった笑顔で言った

「は、はい！！」

（……？

勢いで言ったけど…何で急に？

聞こうにも…今の状態で聞いたら…多分死ぬな、うん絶対死んじゃうよ）

シャピトル４：銀の弾丸

「Ｂｌａｃｋ　ａ　ｗｉｎｇ　ａｎ　ａｐｏｓｔｌｅ　…黒き翼の使徒と呼ぶのがふさわしいですね…」

廃工場でギリカスを殺した男が死体の上に悠々と座り怪しい笑みを放った

「確かあの男は以前あった覚えが…確か…」

「昔話を独り言で言うとは寂しい奴だな…」

死体に腰を下ろしている男性とほぼ同じ服装をした男が剣を背中に掛けて見下ろすように言った

「あなたは……どちらさまでしたっけ？」

「ウルフ…マジで言っているのならこの喉もとに突きつけた剣で首飛ばすぞ…」

同じ服装をした男は剣を瞬時にウルフの首もとに突きつけて顔を近づけた

「まあまあレオンさん、冗談に決まってますよ」

ウルフは苦笑いしながら目の前にあるライオンのような髪を赤くした髪型をし、紅い瞳をぎらつかせた顔を見た

「で…ＫＡＲＡＳＵについて何か分かったのか？」
レオンは顔をどかし静かに剣を納めた

「ええ、居場所までは分かりませんが…」
ウルフは笑みを止めた
「首班人数は５人…各国に１人おりその国のどこかに育成所…まあガーデンと言った感じのとこですがそこにいるらしいです」

「残り二人はどこかの拠点にいるって事か…」

「ええ、しかもそのガーデンでは新たな戦力を高める為に見習いと言う形で孤児院から毎年数人ずつ引き入れて育ててるんですよ。そして首班のうち二人の名が分かりました…ソルド＝グラン、レバン＝ウィンド」

「何はともあれ戦力が上がり完全となる前に潰さないとな…」
レオンは腕を組みいつの間にか時間が経ち夕焼け空を眺めた
「幸いな事にレバンと言う男は現在この国におり、クラウンと言う大企業の家に雇われてるんですよ…」
死体の上からウルフは立ち上がった

「まあ、私の範囲ですから任せてくださいよ」

ウルフは笑顔でレオンに言った

「ま、あの方が決めた事だ出番が来るまで自分のまかせられた国に戻るさ」

そう言うと紅い羽が当たりを包み込み消えた

「レバン君…あなたから消させていただきましょうか…その後からでも育成所は潰せますしね…」

ウルフはゆっくりと歩き出して廃工場を跡にした…残ったのは黒い羽となり消え去った死体だけだ…

シャピトル5：社会見学！？

「社会見学？」

レバンはレノンの屋敷に戻って朝同様、ソファーに腰をかけクロウアプソーテルの手入れをしていた

「そう、社会見学！！」

レノンがソファーから離れて窓の方に向かい歩き出したかと思うと急に振り返りレバンにぐっと顔を近づけた

「何で今更？
俺には必要ないぞ」

「レバンはずっとソルドさんが作り上げた組織の基地に居たんだから今の社会を知らなさすぎる！！
だから仕方なく私が案内してあげると言っているんです！！」

「だから俺は…

「さっさとコレに着替えなさい！！」

レノンは少しお兄さん系の入った服を無理やりレバンに渡すと部屋を出ていってしまった

（人の話聞けよ…）

レバンは渋々服を着替え始めた

（ギリカスはまだ生きてる…
だからあまり外にレノン達を出したくない…
それに謎の気配の事も気になるしな…）

レバンは溜め息をつきながらも着替えを終えて廊下へと繋がる扉にてをかけた

「着替え終えたぞ」

「きゃっ！？」

扉を開けたとき扉にもたれかかっていたのか勢い良く倒れた

「大丈夫か？」

「え、えぇ…」

レノンは腰をさすりながら壁を支えにして立ち上がった

「少し、待ってて下さいね…」

レノンはレバンを部屋の外で待っているようにと言うと部屋の中に急いで入っていった

1時間後…

「お待たせ」

「おそ……い」

レノンの姿を見た時言葉を失った

レノンの姿はボーイッシュな感じの服装にまとめられていた

「へん？」

「いや、そっちの方が似合う…」

レノンは少し照れていた

「で、どこに行くんだ？」

レバンは腕を組みながら壁にもたれかかっていた

「最初は…科学的遊園地に」

「科学的遊園地？」

「行けばわかるわよ」

レノンはレバンの腕を引っ張り駆け足で外に出て行った

外にはリムジンが待機していた

バンッ

リムジンに乗り込むと扉が自動的に閉まり目的地を音声入力し発信しだした

「隊長とはどういう関係なんだ？」

レノンは飲み物をまた音声入力で注文し、丸い形をした飛空型小型ロボットがおぼんに珈琲を乗せてレノンとレバンに渡した

「立ち上げるのに家がお金を貸したの。」

レノンは一口飲み、苦かったのか大量の角砂糖を先程のロボットに運ばせてカップの中に大量に入れていた

（甘党か…よく太らないな）

「それから親しくなって色々頼んだりしてるわけ」

「で、後どれくらいでつぐんだ？」

レバンはもういいやって感じの顔をしながら高速に乗った車の窓から見える景色を眺めていた

「あと３０分よ」

レノンは少しいらついていた

「そうか」

レバンはいまだに窓の外を眺めていた
景色は朝だということなので車は少なくそう目立った高いビルもなく徐々に見えてきた海の景色が広がっていた

「眠い…」

「寝たら殺しますから」

レノンは目をこするレバンに対して作り笑いで脅していた

「さ、ついたわよ」

あれから30分が経ち目的地である科学的遊園地についた
見た目は何らかわらぬ普通の遊園地なのだが一体どこが科学的なのだろうか

「行きましょう!!」

「お、おい!!」

レノンはレバンの腕を引っ張り園内へと連れて行った

中に入ると沢山の人がいた

「まだ朝の9時で始まったばっかなのになんだこの人の多さは」

レバンは人の多さにただ唖然としていた

「気にせず行くわよ」

「のあっ！？」

レバンは再び連れて行かれた

「サイエンスジェット？」

連れてこられた先に見えたのは沢山の人が並んだ行列とサイエンスジェットとかかれた看板の後ろにある見るからに怪しそうなジェットコースターだ

「おい、並ばなきゃいけないだろ？」

レノンは並ぼうとするレバンを無視して先頭に向かった

「気にしなくて良いわよ」

（いや、駄目でしょ並ばなきゃ）

レバンはそう思いつつもレノンの後を追った

先頭に付き、レノンは何やら係員と話している

「さ、早く」

係員はレノン達を通した
レノンはレバンを呼び、奥に待ち構えるあの怪しそうなジェットコースターの先頭に乗り込んだ

「一体何が起きたんだ？」

そう言いつつもちゃっかりと先頭に乗り込んでいる

「ふふっ気にしなくて良いわよ」

笑顔でそう言うレノンに何も言えないレバンであった

そして、他のお客さん達も乗り込むとブザーがなり、ジェットコースターがゆっくりと動き始めた

「……」

「大丈夫か？」

数分後近くのベンチに横たわるレノンがいた

「だ、大丈夫…よ」

大丈夫じゃなさそうだ

「あんな物が駄目なのにみな良く乗るな…」

レバンが辺りを見回すとレノンと同じ状態の者が沢山いた

「よ、良く平気ね…」

レノンは少し楽になったのか体制を変えてベンチに座った

「あんなもん大した事無いな」

レバンも隣に腰を下ろした

「そ、そう…」

しばらくレノンは休憩を必要とするみたいだ

「ほら」

レバンはいつの間にか暖かい缶ジュースをレノンに渡した

「ありがとう」

レノンは受け取り蓋を開けて一口飲んだ

「次何乗るんだ？」

レバンも缶ジュースの蓋を開けて一口飲んだ

「予定を変更して今日は閉園時までここで遊ぶ
そして次はあれ！！」

レノンが指した先にはレーシングカートらしき物があった

「出来るのか？
できそうに見えないが」

「何か言った…？」

レノンは飲み終えたスチール製の缶を握りつぶした

「な、何でも御座いませんです！！」

～３０分後～

「いわんこっちゃない…」

レノンは再びベンチで死んでいた

「うぅ…
何であんたにはできて私には出来ないのよ……」

「俺はレーサーの資格もあるしバイク、トラックなどの免許持ってるからな
遊びの奴なんて軽いもんだ」

レバンは腕を組み、うんうんと頷いた

「どーせ私は遊びの奴も乗れませんよ…」

レノンはいじけた…

「まあなんだ…一緒に乗って教えてやるから気を直せ」

それを聞いたレノンは一気に元気になり物凄い勢いでレバンを連れて再び向かっていった

「たのしかったぁ〜」

レノンはうーんと夕日が赤く染めた空に向かって背伸びをした

「良かったな……」

グッタリとした表情でトボトボ歩くレバン

どうやら飲み込みが早かったらしく、ずっと付き合わされていたみたいだ

「さ、そろそろ観覧車に乗りましょう」

「おうっ！！」

笑顔でレノンに返事をした。

それを見たレノンはたたたと観覧車に駆けていき、姿が見えなくなった

「何者だ？

ずっと俺らを監視して…」

レバンは笑みを消し、背後に感じる異様な気に向かって背を向けた

まま言った

「わざと疲れたふりをして彼女……レノン＝クラウンを先に行かせたのですか…」

背後からだんだんとトーンの低い声が近づいて来た

「名を名乗れ…」

レバンの口調が変わった…

戦闘体制に入った証拠だ

「私は……いや、今から死ぬ者に対して名を名乗る事はないでしょう…」

ヒヒヒと気味の悪い笑いが耳元で聞こえた

レバンは体を反転させて後ろに跳び、クロウアプソーテルを開放した

「やる気は…満々みたいですね…」

レバンの先に経っていたのは浅黒いフードに衣を身に纏った人物がいた

顔はよく見えないが話し方と良い5、６０歳だと思われる

「レノンが待ってるんでな…一発で終わらせる」

「名乗っておきますか…
私はウルフ様に仕える科学者…グロムと名乗っておきましょう」
グロムはそう言うと懐からどす黒く輝くクリスタルを3つ取り出した
「私の代わりにこの子たちが戦ってあげますよ…
可愛い実験体がねぇ…」
ヒヒヒと笑いグロムは消えた
「話が噛み合ってねぇぇ！！」
少し苛立ったのか地面を思いっ切り蹴った
「そういや実験体が相手するって言っといて残してったのはあの3つのクリスタルか…
何なんだあれは？」
レバンは周りが騒いでいる中クリスタルに近付き取ろうとした
「しまっ……」
クリスタルが急に光り出してレバンは何か分からない物に弾き跳ばされ自販機に背中をうった
「つ……やられたねぇ…」
レバンは半笑いのまま片膝を立ててクロウアプソーテルを持っていない左手で右肩を抑えた

レバンの視線の先には三体の半分人で半分が機械のサイボーグ人間が立っていた

いや、サイボーグと言っても良いのだろうか？
見た目があまりにも酷く、生々しい配合の痕や皮のはがれた部分が見えている
よってゾンビと言った方が良いかもしれない

「……可哀想に…今楽にしてやるからな」

レバンは剣を強く握りしめ立ち向かっていった

「ぐるじい…タスケテ…」

実験体は苦しみに飲み込まれながらもひたすら辺りを破壊している
…客も巻き添えにして…

（！？
なんだ？剣が弾かれた！？）

レバンが真っ正面から三体の内の一体に切りかかったが傷一つ付けるどころか剣じたいが聞かなかった

レバンは一旦後方に下がり体制を整えると実験体を観察した

（皮膚は機械でコーティングされていて剣じゃ斬れない…

だが、どこかに弱点はあるはずだ…）

「レバンっ！！何してるのよ！！」

「レノン！？
来るなっ！！」

レノンが人混みがなくなりレバンと実験体が対峙してるところに走り込んできた
それに気づいたレバンは追い返そうとしたが、実験体は既にレノンに向かっていた

「ぐっ……」

レノンはとっさ的に頭を抱え込みその場に伏せた

（ぐっ…？）

レノンは自分に痛みがなく、どこかで聞いた事のある声がするのでゆっくりと瞼を開けて実験体の方を見た

「怪我は無いみたいだな…
さっさと逃げろよ…」

剣で防ぐのは間に合わなかったのか頭から血を流しながら背中を盾にして実験体の拳を防いだレバンがレノンの前に立っていた

「？
おい…早くしろ…」
レバンは自分を見て口をパクパク動かしているレノンを見てまた早く逃げろと言ったのだがレノンは動こうとしなかった
（まさか腰抜かしてるのか？）
レバンはため息を吐くと体を回転させ実験体の腹に蹴りを入れた
「……」
レバンは黙って足を押さえた
実験体は弾き跳ばされると後ろにいた二体も巻き添えに倒れていた
「剣に秘められた魂よ…我に第二の姿を示せ」
レバンは剣を前方に構え、そう唱えるとみるみるうちに姿を変え、黒く光リボルバー式の拳銃が現れた
「唸れ…第二の使徒…クロウウィング！！」
レバンはそう叫ぶと三体重なった実験体に目掛け黒羽を纏った銃弾を放った

銃弾は目にも映らぬ速さで実験体三体の額を貫通していた

「あの世では元気に暮らせよ…」

レバンはクロウウィングを元のクロウアプソーテルに戻し、実験体を見下ろしていた

「アリガ…とう…」

実験体は掠れた声でそう言い残すと黒い羽となり消えていった

（……一体何者だ？
人をこんな風にしやがって…
許せねぇ！！）

「で、だ…何時までそうしてるつもりだ？
そして、隊長はメリーゴーランドに悠長に乗って…何のようです！？」

レバンはレノンに手をさしのべ立ち上がらせた
そして少し怒り混じりでレバン達の背後にあるメリーゴーランドの馬に乗って手を振って楽しんでいるソルドを指摘した

「いやぁ～見てわからないのか？」

「……」

まだ悠々と乗っているソルド目掛け再びクロウウィングにして銃口を向けた

「じょ、冗談だよ
緊急任務を言い渡しに来た」

「緊急任務？」

レバンが聞き返す中ソルドはメリーゴーランドから飛び降り、レバン達の近くまで来た

「そうだ、これからレバンはこの大陸にあるガーデンに向かい、いち早い援護をすること」

「！？
ガーデンが襲われたのですか！？」

レバンは目を見開き信じられないと言った感じだ

「そうだ…今は何とか持ちこたえているが、いつやられるかわからない…」

「……分かりました」

レバンは拳を強く握りしめそう返事した

「ちょっと待ってよ！！」

レノンは納得いかない様子で間に入った

「何だい？レノン」

「私との契約はどうなるのよ！？」

それを聞いたソルドは忘れてたと言わんばかりに手を胸の前で打っていた

「打ち切りにきまっ…

「レバンと一緒に行動すれば問題なかろう？
ここに契約書用意したから」

ソルドはヒラヒラと新しい契約書をレノンに渡すとレノンは内容を読んだ後、サインをした

レバンは同時に内容を見た…
そのとたんもうどうにもしてくれと呆れてその場に座り込んでしまった

書かれていた内容とは
［レバン＝ウィンドをレノン＝クラウンの専用傭兵とし、契約主の申し出がない限りこの契約は続くものとする
尚、レバンが契約主の指示に従わなかった場合は契約主の好きにしてよし」

と言うものだ
見るからにレバンの人権を無視した内容ととれるだろう

「明日の朝、レノンの屋敷から転送装置を使い現場に向かう。
だが、ガーデンに行くのはレバンとレノンだけだ。
俺は本部に戻り他のガーデンへの報告、これから起こるかもしれない事に対しての準備を行う。」

聞き終えたレバン達は静かに頷いた

「じゃ、そう言う事で」

ソルドは笑顔で手を振るとレバン達に背を向け元通りの賑わいを戻した人混みの中に消えていった

「夜か…」

いつの間にか空は暗い青に染められ月が人々を照らし出し、イルミネーションのライトが園内を明るくしていた

「遅くなったが観覧車のろうか」

レバンは大人っぽく手をさしのべレノンをエスコート使用としたが

「気取ってんじゃないわよ!!」

「がっ…」

無論、言うまでもなくレノンの拳をくらったレバンだった

シャピトル6：いざ、ガーデンへ

～翌日～

レバンはレインの父、メノス＝クラウンに会うために会社の社長室に来ていた

何故来たのか？
それは昨日の件に加え、これからの事伝えるためだ

「そうですか…レインを頼みますよ」

「はい」

と、レバンは返事をし社長室を後にし待ち合わせ場所まで行こうと扉に手をかけて出ていった

「レイン……無事に帰ってきてくださいね…」

社長室に一人残されたメノスは席を立ち、外の景色を眺めながら悲しい表情を浮かべ、そう吐いた～クラウン邸～

「わりぃ遅れた」

庭先に転送装置の意を表す術式のしかれ、そこには短パンにティイシャツの上に白いコートを羽織ったレインが腕を組み立つ場所へとレバンは頭を掻きながらあの黒いコートを鎖で襟元をつなげた状態で袖を通さずに羽織った格好で現れた

「おそい！！
何してたのよ！！」
「まぁ…い
がはっ！！」
レインは有無言わさずに思いっ切りレバンをぶん殴った
訳くらい聞いてやっても良いだろうに……

「まあまあ落ち着いて」
「まったく…」
レバンがなだめることによってレインは落ち着いた
「レバン準備は出来たか？」
どこからかソルドの声が聞こえてきた
レバンとレインは辺りを見回すがソルドの姿は見当たらない
「レバン、コートの胸ポケットを見ろ」
レバンは指示に従いコートの胸ポケットを手で探ると、２つのカラスをかたどったバッチらしき物が見つかった

「これは小型通信機だ。
本部との通信が行える」
小型通信機の裏を見るとスピーカーとマイクが取り付けられていた
「何時の間にこれを…？」
レバンはレインに一つ手渡すと二人は胸元に取り付けた
「まあ、昨日帰るときに入れといた」
「部屋に入ったんですね…」
「あぁ。
いやぁ～レイン君はあんな下着をはくとは～
しま…
「変態！！！」
レインは顔を真っ赤にしながらマイクに向かって思いっ切り叫んだ
（隊長…いつか捕まりますよ…）
「レイン君…頼むから思いっ切り叫ばないでくれ…
鼓膜が破ける…」
スピーカーから弱々しい声が聞こえてきた
そうとう耳が痛かったのだろう

「隊長、そろそろ本題に移ってくれませんか？
レインが何はいてるか俺は興味ありませんし」

「あ…レバン…歯食いしばって…」

「？」

レバンは訳が分からぬまま歯を食いしばろうとしたが時すでに遅し
レインの壁にも罅をいれる拳がレバンに炸裂していた

（な……何で俺が…）

レバンは三途の川をみたらしい

「さて、そろそろ敷いた陣の中に立ってくれ」

スピーカーからの指示に従いレバンとレインは敷かれた陣の中に入った

「入りました」

「そうか。
これからガーデン近くの都市、ジルに転送する
そこからガーデンへ向かってくれ」

「？
何でガーデンにすぐ転送しないのよ？」

レインの申し出にレバンはため息をついた

「こんな物で戦闘中の中現れたらどうぞ狙って下さいって言ってるのと同じだ
ましてや現状がわからない今は更にだ」

「わ、分かってるわよそれくらい」
腕を組みながら少々頬を赤らめながらムスッとした表情でたつレイン
その傍らには頭に大きなたんこぶを作ってひれ伏しているレバンの姿がある

「何で殴る必要があるのさぁ…」

「うぉーい、もう送るからなぁ」

その声が聞こえた後、魔法陣らしき物は赤く光りレバンとレインはその光りに包まれてその場をあとにした

～ガーデン付近～

「？
静かすぎるな…」

ガーデンは海岸沿いに丸いドームの形で立てられている
その脇にある草が身の丈くらい伸びた草原に姿を潜ませるレバンとレイン
その場は戦闘が行われている筈なのだが…

「戦闘機どころか人すら居ないわね…」

「あぁ…」

レバンは辺りを見回しながらゆっくりとガーデンへと近付く

「ん……血の匂い？」

近付くにつれだんだんと血の匂いがレバン達の鼻に漂ってきた

「遅かったようですね」

レバン達の背後から突如声がし、振り向いた

「誰だあんた…ガーデンの仲間ではないのは確かだが」

振り向いた先には右手に銀色のリボルバー式の拳銃を持ち、赤黒いコートを来てカーボーイハットを深くかぶり黄色い髪の男性が立っていた

「お初…ですかね？
ウルフ…と申します。
私はあなたを殺す者です」

「！？」

レバンはレインを自分の後ろへと下がらせながらクロウアプソーテ

ルを変形させたクロウウィングにして、銃口をウルフに向ける
「初めましてじゃないんだなそれが…」
レバンはウルフを睨みつけながら言う
「すみませんね…全く覚えていません」
「……」
ウルフもレバンに向けて銃口を向ける
「その手に持ってる銃はシルバーウルフキラーだろ？
このクロウウィングの元として存在している銃だ。
それと剣状態の元としても…」
「そうか…君はあの時の…
なら偽物は偽物らしく朽ち果てなさいっ！！」

一発の銃声と共に銀色の鉛の弾がレバン目掛けて撃ち放たれた
「話の途中でしょうが！！」
レバンはすかさずクロウウィングから黒鉛の弾を撃ち放ち、微かに弾道をずらすことに成功する
そのずれた弾はレバンの頬をかすり、その頬からは血がスーッと流れる

「所詮あなたは私のコピー。
オリジナルに勝とうなど考えるのはよしなさい」
ウルフはシルバーウルフキラーを剣へと変形させて一直線にレバン目掛けて突っ込んで来る

「つ…」
レバンも剣に変形させて応戦する
「そこの彼女…レイン＝クラウンは知ってるのですか？
あなたの過去を！？」
「あいにくレインは雇い主だ、仕事以外の事はあまり話さないのが組織として当たり前だと思うが？
なぁ…〝ＲＡＩＯＮＮ〟の３メンバーの一人ウルフ＝ムーン」
ギチギチと音をたてながら剣をあわせていたがレバンは斬り返してレインと共に後方へと跳ぶ

一発の銃声と共に銀色の鉛の弾がレバン目掛けて撃ち放たれた
「話の途中でしょうが！！」
レバンはすかさずクロウウィングから黒鉛の弾を撃ち放ち、微かに弾道をずらすことに成功する
そのずれた弾はレバンの頬をかすり、その頬からは血がスーッと流

れる

「所詮あなたは私のコピー。
オリジナルに勝とうなど考えるのはよしなさい」

ウルフはシルバーウルフキラーを剣へと変形させて一直線にレバン目掛けて突っ込んで来る

「つ…」

レバンも剣に変形させて応戦する

「そこの彼女…レイン＝クラウンは知ってるのですか？
あなたの過去を！？」

「あいにくレインは雇い主だ、仕事以外の事はあまり話さないのが組織として当たり前だと思うが？
なぁ…〝ＲＡＩＯＮＮ〟の３メンバーの一人ウルフ＝ムーン」

ギチギチと音をたてながら剣をあわせていたがレバンは斬り返してレインと共に後方へと跳ぶ

（ＲＡＩＯＮＮ？
何それ…それにレバンがコピー？
どういう意味なのよ？）

レインはレバンの背中をじーっと睨みつける

レバンはその視線を感じたのか身をぶるぶると少しふるわせた後、
ゆっくりとレインを見る

「えっと…
何か？」

一応、笑顔で話しかけるも
「説明！！」といわれしぶしぶ話し出すレバン

「まずＲＡＩＯＮＮってのは俺が所属するＫＡＲＡＳＵと同じ隠し
傭兵部隊だ。」

「て事は…彼もかなりの腕前があるって事ね…
じゃああなたがコピーって？」

「あぁ？あぁ～それはまたの機会に頼むわ」

へらっと笑うとレインを更に奥へと下がらせる

「ちとまじになるか…
レイン…耳と目をふさいでこっちは絶対に見ないように…」

レインは首を傾げながらも言われた通りにする

「さて…殺すか…」

レバンは剣に力を込めて黒羽を纏わせる

「行くぞ…」

下段に構えたままウルフの視界から消えた

「後ろですか」

ウルフは難なく自分の剣で背を向けたまま防ぐ

「まだ完全にその技は完成してないみたいですね…
私が見せてあげましょう」

ウルフはレバンをそのまま弾き跳ばすとレバン同様、黒羽を纏わせる

「ウルフ…クロー…ブレイク」

レバン同様その場から消えたのだが

「！？」

レバンの周りに黒羽の竜巻が舞い上がる
そしてその羽は無数の鉤爪がひっかくようにレバンに刃向かう

「く…」

レバンは体中切り傷だらけで剣を地面に差し、それを支えとして立っていた

「……それだけか…
なら、真似と言われた技だが…
既にオリジナルがある」
鋭く尖った目で目の前に立つウルフを睨みつける
（目つきが変わった…？）
「なら見せていただきましょうか…」
ウルフは剣を前方に剣の腹を左手で翳した状態でレバンの技に対して構える
「クロウ…ゲヘナ（地獄のカラス）」

レバンがそう放った瞬間あたりは夕刻のような明るさになり黒羽が雪のように舞い散りだんだんと床を埋め尽くして行く
「レインはいませんか…一種の幻術のようなものですかね…」
ウルフは辺りを見回すが草村に身を潜めていたはずのレインはおらず、居るのは目の前で傷だらけで立っているレバンだけだ
「いや…現実だ傷はな…
ある意味結界だ。
この中ならいくら壊しても現実世界には支障はない。」

レバンは右手に持つ剣をウルフに向ける
「単なる…って訳でもなさそうですね…」
「まあ…な
さて…クロウゲヘナ第一の型を見せてやる」
レバンは瞬時にウルフに剣を叩き込むが剣でガードされて剣どうしがギチギチと音をたてながら交差している状態だ
「第一の型…アースアロー」
レバンがそうはなつと同時に床に溜まっていた黒羽がウルフ目掛けて飛ぶ

「異次元内での攻撃を得意とするのですか！？」
ウルフはとっさに後方へと跳び、向かってくる黒羽を一枚…また一枚と切り落として行く
「今回は依頼主がいたからな…
依頼主を巻き込むわけにはいかないだろ？」
レバンは黒羽に紛れてウルフに剣で切りかかる
「！？」

ウルフは反応仕切れずにレバンからの一撃をくらう。
そして、レバンはと言うとウルフがよろめいた隙に更なる追撃をするのだが
「終わりだ！！」
「な……」
レバンの腹部を血がしたたる白銀の剣が貫いていた。
「くそが…」
白銀の剣を抜くと共にその場に剣を刺し、血が流れ出る腹部を抑えながら膝まつき傷だらけになりつつも見下しているウルフを睨みつける
「レ…レバン！？」
レバンが深いダメージを負った事によって集中の途切れによる幻術世界が解かれた。
「力が無いとは虚しい物ですね…」
ウルフは剣を銃に戻すと膝まつくレバンのもとに駆け寄ったレインに銃口を向ける

「っ…ハァ…ハァ…
何故あの状況で俺を貫けた…
完全に不意をついた…はずなのに…」

レバンは自分の後ろにレインを隠すとそう言った。

「……まあ…レベルの差ですね。
あなたはまだまだ弱い。
私の手に掛かればあなたなどたやすいものです」

「わざと俺に付き合っていたのか…」

「さて、そろそろ終わりにしましょうか。」

撃鉄を下ろし引き金に指をかける

「あの方はあなたを造ったことを喜んでいましたよ…
あなたは良い駒になると…」

鈍いカチという音がしたかと思うと、耳を貫く音が響き渡った

「っ…ハァハァ…
間に合いましたね」

ウルフの手元にあったシルバーウルフキラーはリボルバー部より少し引きがね部分に近い所に黒い丸い跡を残して草原の上に落とされている

「ミラー！！」

レバン達は声の主の方向へと振り向く
そこには蒼い瞳に青いショートカットの女性がレバンの着ている服と少し異なった形をした服そうをし、白煙を出しながら淡い蒼の銃の銃口をこちらに向けている

「ウルフ様、敵の増援が来たもよう！！
我が隊は危機に陥っております！！
いかが致しましょうか！？」

赤黒い戦闘服を着たひとりの戦闘員が自分の左手を見て動こうとしないウルフにたいして片膝を立てて報告をしている

「ミラー＝ライトですね…？
かつて表舞台で蒼い翡翠（カワセミ）と呼ばれた一流の狙撃主…
数年前、姿をくらまし行方不明になったのですが…
まさか、こんな裏舞台でお会いできるとは…」

ウルフはシルバーウルフキラーを拾い上げ細めた目でこちらに銃口を向けているミラーに向かい話しかける

「周りは完全に包囲致しました。
お退きにならないのならばこの場であなたを…」

「無理ですよそれは」

遅れて駆けつけたガーデン側の兵士達がそれぞれの武器を構えてウルフ達の周りを取り囲み、圧倒的に不利な状況のはずなのだがあっさりと否定するウルフだった

「ガッ……」

「えっ！？」

先ほどまで取り囲んでいた兵士達が次々に音をたてて倒れ込んでいくではないか

その状況に終始戸惑うミラー

「いやはやあなた様とあろうお方がここまでやられているとは正直驚きましたな……ヒヒッ」

「その薄気味悪い笑い声…
あん時のみょうちくりんな科学者か…」

レバンは剣を支えとして血が流れ出る腹部を左手で圧迫しながら立ち上がり上目で目の前にいるウルフと白衣を着た変な学者を睨みつけた

「みょうちくりんとは失敬な！！
こうみえても私はウルフ様の…

「黙りなさい。

同じ台詞は聞き飽きますよ。」

「わ、わかりました…
ではウルフ様一時撤退を…」

「分かりました。
では皆様、またいずれ…」

ウルフはジェントルマンのようにお辞儀をした後グロムと共に白い煙の中へと消えていった

「っ……」

緊張の糸が切れたのかレバンはその場に倒れ込みその周りに血だまりができあがってゆく

「！？
今すぐ救援部隊をよこして！！
あとあなたも一緒に来なさい！！」

ミラーは無線を使いガーデンの救援部隊を呼び、そして着いたと共にレインの腕を引っ張りガーデンの中へと向かって行くのだった

シャピトル7：レバン＝ウィンド

「ここならまだ休める環境を維持してますから大丈夫でしょう。」

所々剣によって切られた跡が生々しく残ってはいるがまだ人が数人休める程の環境がある医務室の窓側のベッドに寝かされているレバンその傍らを俯いたままパイプイスに座るレインと壁にもたれかかるミラーがいた

その医務室にはレバンの他にも傷つきベッドに横たわっている青い制服を来た生徒達
看護にあたる白衣姿の先生がいる

「もしかして…
自分のせいだと思ってないですか…？」

ポンと俯いたままのレインの肩に手を置くミラー

だが、その問いかけにレインは何も反応しなかった

「もしそう思ってるならあなたは帰りなさい」

「…！！」

「レバンさんは一番に仲間を大切にしてる。
だから仲間の為なら命を投げ出す覚悟もある方です。
だから自分のせいだと思ってとどまり、そこから成長しようとしないのなら帰りなさい。」

「……
自分のせいもあるわよ…
でも…それを悔いてとどまり続けるつもりなんか無いわ。」

何か目に熱い炎が見えるレイン
拳を強く握り締め急に立ち上がりミラーに顔をぐっと近づける

「レバンの過去を教えなさい！！
ウルフとか言う奴と何の関係があるのよ？
コピーってなに？
ＲＡＩＯＮＮは？
レバンについて知ってる事全てを言いなさい！！」

「でもそれはレバンさ…

「言う！！」

落ち込んでいたかと思いきやこの脅迫
ミラーはレバンに悪いと思いつつも話始めるのだった

～三年前～

「……で、俺になにをしろと？」

「レバン、そんないかつい目しないでぇ

リラックスして仕事しなよ？」

「良いから早く作戦を言え」

人里離れた雪山の中腹辺りにある山小屋で暖をとるレバンにソルド、ミラーにレインとそっくりな女性がいる

「お、お兄ちゃんソルドさんに失礼だよ…」

「ベルナ…俺はお前を連れてきたくはなかった…
それをこいつが…」

壁にもたれかかりながら机を囲むように椅子に座る三人の内のソルドひとりを睨む

「あっはっは…
いいんだよベルナちゃん
私が無理に君を連れてきたからいつもよりキレてるだけ
それ以外はいつもと同じだからなれてるよ」

ベルナの頭を撫でようとして腕を伸ばした時だった
ソルドの首輪にひんやりと冷たい物の感触が…

「汚らわしい手で妹に触れるんじゃねぇ…」

目が据わっているレバンの所持していた白銀の細身の剣がソルドの首をとらえていた

「シスコンだねぇレバンく…」

「死ね…」

「あはは…本題に入らないと私の命が本当に危ないから入らせてもらうよ」

にこやかに微笑みながら話すソルドだが首筋には包帯が巻かれていた

「今回はレバンに先発としてこの雪山の奥深くにある反政府の化学組織のアジトに潜入
内部の敵をけちらしながらメインコンピューターまでの道筋を作ってもらい
私とミラーでベルナを護衛しつつメインコンピューターへ移動
そこでベルナ自身にメインコンピューター内部のデータの採取と破壊をしてもらい任務完了だ」

「了解。
ならば、この吹雪が止み次第アジトに接近し作戦結構でいいんだな？」

レバンは窓の先にある白い靄として見えるほど視界をふさぐ吹雪を背を向けたまま親指で指差す

「あぁ。
んじゃ、止むまで遊ぼうかぁ。
何が良い？何が良い？」

「た…隊長、任務前ですよ？
少しは静かに作戦を頭にいれては…？」

「ほかっとけ。
もとからそう言う奴だこいつは」

当の本人は聞こえているのかいないのかわからないがアタッシュケースからカードやらチェスやらを取り出してベルナとはしゃいでいる

「行くか…」

数時間後、吹雪が大分収まり視界が少しだが改善された世界の中、巨大な科学施設から少し離れた場所から望遠鏡らしきもので施設を覗き、そしてそれをしまうと背中に背負う白銀の剣を握りしめて施設内部へと向かってゆく

「まずは外の見張りを全てかたしてくれるはず。
暫くしたら私達も行きますよぉ？」

背後の岩陰に身を隠しているソルド達はレバンが見張りを全てかたしたサインを待ちその場で待機している

「侵入者だ！！
こっちだ！！早く！！」

「チィッ……」

白いふわふわしたコートを着、兵士らしい銃を片手に持ち増援を呼びかける

「数は…2人か…
だが援軍が来るなら…十倍…いや、二十倍以上は来るか…」
レバンは背中の剣を抜き

「滅する！！」

兵士達の呼びかけによって十人程度の仲間が到着するもレバンは物ともせずに次から次へとその身に返り血を浴びながら切り刻み走り抜けた頃にはすでに兵士達は屍とかしていた

「居たぞ！！あっちだ！！」

「……」

倒したばかりなのだがまた次から次へと兵士達がわらわらと…

「いぃ憂さ晴らしになりそうだ…」

レバンは剣を再び構えると走り出し施設内部へと向かいつつ兵士達だけではなく監視カメラも破壊し、後から来るソルド達の道を切り開いて行った

「これでいいだろう…」

とりあえず施設の内部へと向かう道を作りおえ
剣で巨大な扉を切り開きなかへとかけていった

「内部は意外と分かりやすいな。
あちらこちらに看板がある。
迷わなくてすみそうだ。」

メインはシステムフロアの占拠
メインシステムが存在するのはＢＦ５
しかも、侵入はバレているため地下へと続くエレベーターは完全に停止。
つまり階段で降りるしかないわけだ。

病院のような内装をした中をゆっくりと歩き観察するかのように辺りを見回しながら進んでゆく

「やっぱり居たか…」

「ギィー…」

目の前にはプロペラのついた浮遊型とキャタピラーのついた陸上型の対侵入者用のマシーンが合わせて４機現れた

「プロトタイプか…」

レバンは剣を握り締めると姿勢を低くし、相手が備え付けのガトリング砲で標準を合わせ終える前にロンダートからのバクチュウを行い背後に回ると横一線に剣を払い、４機を一瞬にして倒した

チリチリと音を上げて横たわる対侵入者用マシーン達

そのマシーン達の背後にはまた新たなプロトタイプのマシーン達が数体現れていた

「面倒だ……」

後頭部をポリポリと掻くレバン

「これは一階ごとに戦闘に入りそうだな。」

まばたきをする間に先程のプロトタイプ達はガラクタとかしていた

「次の階へ行くか…」

コツ…コツ…と足音が反響し、それしか聞こえない

（研究員の姿が見えないな…
これほどの騒ぎに気がつかないわけではないだろう…？）

地下二階につくも人の気配すら無かった…

「さて、そろそろいこうかぁ。
レバンならもうかるーくフロアひとつ占拠してるでしょ」

ソルドはフフ　フーンと鼻歌を歌いながらサクサクと施設へと向かっていく

ベルナとミラーは何がそこまで楽しいのか分からずに両手を肩まであげてやれやれと言う感じだ

「何が楽しいの？
って思ってるでしょ？」

「！！」

「だって疲れないで一番下までいけるのが嬉しいからねぇ」

（（……呆れた））

～施設内部一階～

「ん～中は病院みたいな内装だねぇ。
だけどちょっと見逃せない物みちゃったかな？」

コツコツと音を響かせながら歩くソルド達
途中で歩くのをやめて透明なガラスの壁の部屋の中をのぞき込む

「これなんですかね？」

「何かの設計図みたいなのがありますね」

「ちょっと入って調べてみようかぁ……ていっ」

パリーンと言う音と共に粉々になる透明なガラスの壁
それはソルドによるグーパンチによっておこったものだった

同じ様にのぞき込んでいたベルナとミラーは目を丸くするのみ

「プロジェクトクロウ…？」

床一面に散らばる紙の中から一枚拾い上げその内容を読むソルド

『プロジェクトクロウ　（Ｐ・Ｃ）

我々が発見した伝説上の生物とされていたカラスの化石から何とか取り出すことができたＤＮＡを生かした兵器開発が今回の課題となっている。

以前にＰ・Ｗ（プロジェクトウルフ）にてている。」

オオカミとカラスのＤＮＡ…

私達はＬＤ（レジェントＤＮＡ）と呼ぶ。

この遺伝子は誰かに受け継がれている可能性あり。

（確認はとれていないがＬＤを受け継ぐ者には……×××××××××××』

（んん！？こっから先は意図的に破られていて読めないなぁ…）

頭を掻きながら他にもないかと床一面の紙を漁るが似たような物も、破れたものも見つからない。

どうやら見られたくない内容が書いてあると推測できる。

とりあえずソルドはミラーとベルナに紙を見せる。

「もし、これが本当ならば兵器はここにあるはず。

他の勢力がこの事に気づかぬうちに私達で回収しなくては…」

読み終えたミラーは顎にてをそえて考え込むソルドにそう言う

「あぁ…私の嫌な考えが当たっていなければ良いのだが…
今は先に進もう。
時間がない！！」

いつになく真剣な顔をするソルド
その表情だけでかなり大変な事が起こりそうなのがうかがいしれる
地下に向かい右足が新たな一歩を踏みしめたまさにその時…

「ドゴーンッ！！」

大地を揺るがす音がレバンが先に向かった地下深くから聞こえた

「「急ごう（ぎましょう）！！」」

〜ＢＦ５〜

「なんだこいつは…」

メインルームを目の前にして立ち止まるレバン
目の前には黒い翼が生えた赤い戦闘服姿の男と白銀の毛並みに尻尾、
耳、尖った爪に赤黒い瞳をした同じ戦闘服を着た女性がたっていた
見た目からして正常ではないことは感じとれる

「……やるか…」

白銀の剣を下段に構えて突っ込むレバン
その姿を見ても身動きひとつしない戦闘服姿の者達…
（まずは翼を持った方に行くか……）

（！？）

剣を切り上げて翼を持った方を真っ二つにしたのだがまったくもって感触がない
空を斬った感じだ

「羽……？」

目の前に一枚の羽がはらりとレバンの服につく

（くそ……あいつ等はどこだ！？）

その羽をつまみあたりを見渡すが先ほどの者達はいなくなっていた

（……さっきの巨大な音はこの奥からだったな…
今は任務遂行させるのがさきか…）

白い両開きの扉を押し開けて中へと入る

「なんだコイツは……」

入ってすぐ目に入ってきたもの…それは雷を帯びた金色の色をしたレバンの背丈とあまり変わらぬ鳥が機械やモニターだらけの部屋の真ん中にある巨大な筒状の中に液体と何かが入っている前にいる

「ギィアァァァ……！！」

「がっ…」

鳴き声と共におびただしいほどの稲妻がレバンを襲う

稲妻を受けたレバンはというと…

「左腕が……」

不意打ちにも関わらず直ぐに避けたのだがよけた先にあったむき出しの尖った金属片に左腕が刺さり現段階では使い物にならなくなってしまっていた

「あいつは…いったい……ん…？」

その場から動こうとしない様子を見て不思議に思うレバン

「まさか…神雷鳥か…？」

剣を支えとして立ち上がると後方から…

「レバン！！」
「レバンさん！！」
「お兄ちゃん！！」

ベルナにソルドとミラーの三人が走ってきた

「……任務はまだ遂行中だ…」

眉間に皺を寄せる

「いや、任務は完了。
あれは神雷鳥、レバンくんも分かるよね？」

「……チッ……」

「神雷鳥ってなんですか？」

首を傾げてソルドに聞く

「神雷鳥…あれは雷の生まれ変わりと言われ各地の伝記に語り継がれる忌まわしきモノ（心に巣くう闇）を浄化させる能力を持つ鳥だ。」

「よくできましたぁ～。
パチパチパチ～…んがぁ！！」

「…黙れ…」

「め、目がぁ…」

「お兄ちゃんソルドさんになんてことを！？
って左手怪我してる！！
手当てしなきゃ！！」

ふざけたソルドの目にレバンの左手から流れ出る血がクリーンヒットしたわけだ

「…警戒しているか…これでいいだろう？」

レバンは神雷鳥に向きながらそうはくと剣を地面に差して腰を下ろし、ベルナの手当てを受ける

「クルルル…」

バサッと一羽ばたきすると神雷鳥は筒の方を向き、目を閉じていても明るすぎる光を放つと霧のように消えていった

「あれは…？」

「完成してしまっていたんだね…」

筒の中に残っていたのは黒光りする剣と白銀に輝く銃だった

「呪われた２つの武器
その武器は黒い羽を従える者のみに従うであろう」

「この声は！？」

いつから空いていたのだろうか？
天井にぽっかりと空いた穴から赤黒いコートを羽織った男が舞い降りた

「ウルフ…何をしに来た…？」

眉間に皺を寄せ、凛とした表情をみせるウルフを睨みつける

「あなた達の抹殺と武器の回収…
本来ならば回収だけで良かったんですが…彼女がいると言うことで任務を少々変更しました。
黒羽の純血種…ベルナ…」

「！？
ベルナ、下がってろ！！」

レバンは剣を構えてベルナを自分の背に隠した

言うまでもないがソルドとミラーもベルナの近くにより、三人で囲む形になっている

「二人で守っておけ！！」

「レバン！！待つんだ！！」

レバンはソルドの制止も受け止めず、突っ込んで行く

「まだまだ子供ですね…」

目の前にいたはずウルフだがいつの間にかベルナの背後に立っている

「さぁ…ベルナ…あなたの力をいただきますよ」

レバンにソルド、ミラーは何が起きたのかさえわからぬうちにその場に横たわっていた

「さあ、あなたと少しお話したいのですが…その物騒なものおさめていただけませんか？」

ウルフはゆっくりとベルナに近づきふるえる手でこちらに向けているナイフを優しく奪い取る

「怖がらないでください…
命は取りませんから。
私について来ていただけるならば彼等は殺しはしません。」

ウルフはそこまで言うとベルナから顔をはなし、レバンが横たわっている筒状の建物があるとこまで行くと肩まで手をひらっと力なく上げてこちらに怪しい輝きを持つ瞳を向ける

「……わかりました行きましょう…」

ゆっくりと力なくウルフの元へと歩み出すベルナ
ウルフはその様子をみると階段を降り、ベルナへと近づいて行く

「……くな……」

「…！？
お兄ちゃん！？」

「いく…な…
お…まえ…は…おれ…が…まもる…！！」

横たわっていたレバンはゆっくりと息が荒いなか力強く言葉を発しながら立ち上がる

その顔は苦痛に満ちているのだが瞳だけは強い意志を抱いたままである

「意外ですね…ですが彼女と約束しましたので殺しはしません…私はね…」

ウルフは目を細めながら笑みを浮かべるとベルナの肩に手をかけてその場から姿を消した

「クソが……」

レバンは力なくその場に跪く

ビィー　ビィー　と警報の音が聞こえてきた

「施設丸ごと爆破ってやつか…
急ごう今ならまだあいつにまにあうはずだ…！！」
レバンは二人を担ぎ上げて出口に向かうのだが…
その場には先ほどのあの2体がいた

「ちぃ…邪魔だっ！！」
レバンは二人をおろすと近場に落ちていたパイプの棒を拾い上げて
2体に向けて構えた

「うおぉぉぉ！！」

レバンの突進から繋がる切り込みを翼の生えた兵士はいつからかは
分からないが黒い羽を纏う剣で防いだ
ギチギチと音を立てて剣を交える背後から獣の容姿をした兵士がレ
バンの背中を切り裂き、それによってよろめいたレバンを羽を纏う
剣が肩から右わき腹にかけて切り裂いた

「がっ…」
レバンはその後も切りかかってはやられと何度も繰り返していた
「俺は…　ベルナを助けに行かなければならないんだ！！
そこをどきやがれぇ！！」

何度かの攻防を行いナイフと同じような長さまでになってしまった
パイプの棒を握り締めて向かって行く
だが、結果は先ほどまでと同じだった
「あいつを…ベルナを…」
体の至る所から血が吹き出しその血でレバンのいる床が赤い水たまりを作り出している
『弱いなお前…』

（誰だ！？）
レバンは辺りを見回すが倒れている二人と目の前の2体しかいない
『誰だとは失礼な奴だなお前はぁ
オレ様は後ろにいるじゃねぇか』
（後ろ…？）
振り返るが黒光りするあの剣以外何もない
「まさか…」
『遅すぎだぁ気づくのがよぉ
まあいぃ、オレ様の力の片割れが封じ込まれていやがる剣使いやがれ。

ちなみに目の前の翼野郎もオレ様の力の片割れが封じ込まれていやがる。
訳は後で話してやるからさっさとそれ使って終わらせやがれ』

「訳分からんが…有り難く使わせてもらおう！！」
黒いコートを靡かせその剣を手にする
「さぁ…踊ろうか」
『さっきと違って冷静になったなぁ』
（しばらく黙ってろ…）
レバンは体をひねりながら翼の生えた方を飛び越え背後に回り込む
翼を羽ばたかせ散った羽が矢のようにレバンめがけ飛んで行く
レバンは体を回転させながらの剣戟ですべてをはじき落としそのまま切りかかり剣が交わる形となった
「……」
その背後を獣化した方が攻めいるもばく宙で交わし横一線に切り裂いた

「残るはおまえだけだ…」

「！？」

翼の生えた兵士は突然紫色の光に包まれると黒い翼の完全なる鳥となった

「カラス！？」

目を見開き驚くレバン

この世界で伝説の生物として存在するからだ

『早く殺しやがれ！！』

レバンはとっさにカラスを切り裂いた

（……何でこいつが…）

（一体なんなんだ…？）

『悩んでるとこわりぃがさっさと脱出しねぇとヤバいんじゃねぇのか？』

我にかえったレバンは

「…そうだな。

後で全て話せよ。」

『へいへい』

その剣を腰に挿し、再びミラーとソルドを担ぎ上げて地上へと出るために一歩ずつ歩き始めた

そうして、しばらくの時間が経ち
地上へと出たその数分後には施設は爆発をはじめとして炎上し見る姿が全くなかった

「くそ…流石にいないか…」

ベルナを捜すが当たりは吹雪とまではいかないながらもかなりの雪が降っており視界は悪い

その上姿を消してからかなりの時間が経過しているためにあとを追う事も出来ない

（とりあえず…小屋に戻ってから考えるか…）

『で、俺様から話聞くんじゃねぇのかよ』

（忘れてた…）

レバンは担いだ状態のまま小屋へと向かう

「まずあんたは誰だ？

それと、あいつらは一体なんなんだ？」

『俺様はこの世界じゃあ伝説の鳥〝カラス〟様だよ。
あいつらは俺様のＤＮＡを組み込まれた元人間だぁ。
あいつらつっても鳥の方な』

「そうか…
てことはこの剣にもあんたのＤＮＡを少量組み込まれているわけか。
だが、一体どこであんたのＤＮＡを…？」

あまり驚いた表情も見せないレバン

『驚けよなちっとは。
まあ、ある科学組織が俺様の居場所を探し出して無理矢理捕まえられてみてぇなかんじだ。
まあ、なんとか逃げ出せたからこうやって話せるんだけどな。』

「で…俺に何をしろと…？」

目つきが鋭くなり問いかける

『察しがいいなぁ
やってもらいてぇのは一つ。
俺様の力をこの剣から出せばいいだけのことよ。
その方法は――』

目の前に降り立つ巨大なカラス

『あいつを倒すそれだけだ。
ちなみに４体いるから全て頼むぜぇ』

「めんどうな事になったな…」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5341d/

Black a wing an apostle ～黒き翼の使徒～

2010年10月28日00時49分発行